IB DIPLOMA PROGRAMME
PROGRAMME DU DIPLÔME DU BI
PROGRAMA DEL DIPLOMA DEL BI

N05/1/A1JAP/HP1/JPN/TZ0/XX

88050149

JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Friday 18 November 2005 (afternoon)
Vendredi 18 novembre 2005 (après-midi)
Viernes 18 de noviembre de 2005 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の1(a)の文章と（b）の詩うち、どちらか一つを選んで解説しなさい。（コメンタリーを書きなさい。）

1（a）

杳子（ようこ）は深い谷底に一人で坐っていた。

十月もなかば近く、峰には明日にでも雪の来ようという時期だった。

彼は午後の一時頃、K岳の頂上から西の空に黒雲のひろがりを認めて、追い立てられるような気持で尾根を下り、尾根の途中から谷に入ってきた。道はまずO沢にむかってまっすぐに下り、それから沢にそって陰気な灌木の間を下るともなく続き、一時間半ほどしてようやく谷底に降り着いた。ちょうどN沢の出会いが近くて、谷は沢音に重く轟いていた。

谷底から見上げる空はすでに雲に低く覆われ、両側に迫る斜面に密生した灌木が、黒く枯れはじめた葉の中から、ところどころ燃え残った紅を、薄暗く閉ざされた谷の空間にむかってぼうっと滲ませていた。河原には岩屑が流れにそって累々（るいるい）と横たわって静まりかえり、重くのしかかる暗さの底に、灰色の明るさを漂わせていた。その明るさの中で、杳子は平たい岩の上に躯（からだ）を小さくこごめて坐り、すぐ目の前の、誰かが戯れに積んでいった低いケルンを見つめていた。

岩ばかりの河原をゆっくり下ってきた彼の視野の中に、杳子の姿はもっと早くから入っていたはずだった。もう五時間ちかく人の姿を見ていない男の目の中に、岩の上にひとり坐る女の姿は、はるか遠くからまっすぐに飛びこんできてもよさそうだった。三日間の単独行の最後の下りで、彼もかなり疲れてはいた。疲れた躯を運んでひとりで深い谷底を歩いていると、まわりの岩がさまざまな人の姿を封じこめているように見えてくることがある。そして疲れがひどくなるにつれて、その姿が岩の呪縛を解いて内側からなまなましく顕われかかる。地にひれ伏す男、子を抱いて悶える女、正坐する老婆、そんな姿がおぼろげに浮んでくるのを、あの時もたしか彼は感じながら歩いていた。その中に杳子の姿は紛れていたのだろうか。それほどまでに、杳子の躯には精気が乏しかったのだろうか。

そればかりでない。あの時、女の姿を目にしてから、立ち止まるまでのほんの僅かな間にも、彼の心の中にはかすかな昏迷があった。二十歳をすこし越えたばかりの、まだ固まりきってない若い男の心には、谷の中でなくても、しばしば昏迷の瞬間がはさまるものだ。彼は女の姿を目にとめた。そして《ああ、あんなところに女がいるな》と頭の隅でつぶやいて歩きつづけ、次の瞬間にはもう、左手の急斜面からごうごうと落ちてくるN沢の、なにか陰にこもった響きに気を奪われていた。このN沢ではときどき遭難が起る。N岳へ伸びる尾根からこの沢へ迷いこむ者がよくある。彼が知っているだけでも五人、この沢で踏み迷って転落している。そのうちの一人は途中で滝から落ちたあと、無意識のまま二日かかってこの出会いまで降りてきて、O谷をふらついているところを、通りがかりのパーティーに保護された。顔にはほとんど外傷もなかったのに、翌日駆けつけた実の兄にもすぐには弟と見分けられなかったほど、顔つきが変っていたという。

彼が立ち止まって目を見はったのは、そんな思いの中からだった。

ゆるやかに傾く河原の、二十米（メートル）ほど下手（しもて）から、女の蒼白い横顔が、それだけ、彼の目の中に飛びこんできた。

それは人の顔でないように飛びこんできて、それでいて人の顔だけがもつ気味の悪さで、彼を立ちすく

ませた。ところが、顔から来る印象はそれでぽったり跡絶えてしまって、彼はその顔を目の前にしながら、いままで人の顔を前にして味わったこともない印象の空白に苦しめられ、徐々に狼狽に捉えられていった。

人の顔ならば、いつでも、誰にも見られていない時でも、たえず無意識のうちに発散させている体臭にも似た表情があるものだ。そんな表情までできれいに洗い流されたように、その顔は谷底の明るさの中にしらじらと浮んでいた。そうかと言って、よく山の中で疲労困憊した女の顔に見られるように、目鼻だちが浮腫みの中へ溺れていく風でもなく、目も鼻も唇も、細い頤も、ひとつひとつはくっきりと、哀しいほどくっきりと輪郭を保っている。女はすこし手前に積まれたケルンを見つめていた。たしかに見つめてはいるのだが、その目にはまなざしの力がない。そして顔全体がまなざしの力によってひとつの表情に集められずに、目の前のケルンを見つめるほどにかえってケルンの一途な存在に表情を吸い取られて渺とした感じになってゆき、未知の女の顔でありながら、まるで遠くへ消えていくかすかな表情を記憶の中からたえずつかみなおそうとするような緊張を、行きずりの彼に強いた。彼の緊張がすこしでもゆるむと、その顔は無表情どころか、物体のおぞましさを顕わしかける。そのたびに彼はそこにいるのが人間であることの証しを、自分が立てなくてはならないとでもいうような気持に追いこまれて、逃げ腰ながら、目だけは一心に女の横顔を見つめ、そして知らず知らずのうちに自分自身の記憶を幼い頃のほうにむかって探っていた。しばらくして、《泣き疲れて、庭の隅にかがみこんで石ころを見つめている子供の顔だな》と彼はつぶやいた。そしてようやく凝視をゆるめて女の全身を見まわした。

躯にはまだしも表情があった。まだ少女のような躯つきだった。女はリュックサックを背につけたまま、小さな腰を岩の上につらそうにのせ、肌色のアノラックにつつまれた上半身を前へ傾けて、両腕を胸の前で組みかわしていた。細い肘がくぼめられた下腹を両脇からきゅうっと押えつけ、たがい違いになった手のひらが肩から腕のあたりをいとおしげにさすっていた。黒いスラックスをはいた脚は太腿をきつく合わせていたが、膝から下がなにか困りはてたように互いに外側へゆるく開き、キャラバンシューズのつま先が地面の砂利の中へひしひしと喰いこもうとしている。そんな姿勢から、顔がどことなく全身の防禦の構えにそぐわない感じで、まるで何かに引き渡されたように前に差し出されている。それでも全身を見まわしてまた顔を見つめると、顔はもうはじめに見たときほど無表情ではなくなっていた。女は眉をかすかに顰めて、唇を細くひらき、躯の内側の痛みをじっとこらえているように、目の前に積まれたケルンに見入っていた。そこにいたわるべき病人のいることに彼はようやく気がついて、若い登山者らしい態度を取りもどし、女のほうにむかって足を踏み出した。

(古井由吉『杳子』一九七〇年)

〈注〉 古井由吉(一九三七~) 小説家。代表作に『槿』『中山坂』などがある。
出会い 川や沢などの合流する所。
ケルン 山頂や登山路に、道標や記念として石を円錐形に積み上げたもの。
渺とした 水面などが限りなく広がっているさま。

1(b)

死んだ男

鮎川信夫

たとえば霧や
あらゆる階段の跫音(あしおと)のなかから、
遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。
――これがすべての始まりである。

遠い昨日……
ぼくらは暗い酒場の椅子のうえで、
ゆがんだ顔をもてあましたり
手紙の封筒を裏返すようなことがあった。
「実際は、影も、形もない？」
――死にそこなってみれば、たしかにそのとおりであった。

Mよ、昨日のひやかな青空が
剃刀(かみそり)の刃にいつまでも残っているね。
だがぼくは、何時何処で
きみを見失ったのか忘れてしまったよ。
短かかった黄金時代――
活字の置き換えや神様ごっこ――
「それがぼくたちの古い処方箋だった」と呟いて……

いつも季節は秋だった、昨日も今日も、
「淋しさの中に落葉がふる」
その声は人影へ、そして街へ、
黒い鉛の道を歩みつづけてきたのだった。

埋葬の日は、言葉もなく
立会う者もなかった
憤激も、悲哀も、不平の柔弱(にゅうじゃく)な椅子もなかった。
空にむかって眼をあげ
きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。

「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」
Mよ、地下に眠るMよ、
きみの胸の傷口は今でもまだ痛むか。

（鮎川信夫「死んだ男」、詩誌『純粋詩』一九四七年）

〈注〉 鮎川信夫（一九二〇～九八年）詩人・評論家。一九四二年、兵役のため大学中退。四三年、スマトラ転属。四四年、傷病兵として帰還。代表作に『現代詩作法』、『鮎川信夫全詩集』（一九四六～七八年）、『詩人と民衆』などがある。